

ISSN 2186 – 3989

心理学専門教育を通しての  
大学生の心理学概念の変容過程  
—心理社会学科の4年間を振り返って(1)—

後藤 和史・小島 弥生・谿 雄祐・西浦 真喜子  
仲嶺 実甫子・河野 俊寛・林 洋一

The Formation Process of Psychology Concepts in University Students  
through Psychology Education

Kazufumi Gotow, Yayoi Kojima, Yusuke Tani, Makiko Nishiura  
Mihoko Nakamine, Toshihiro Kono and Yoichi Hayashi

北陸大学紀要  
第59号(2025年9月)抜刷

# 心理学専門教育を通しての 大学生の心理学概念の変容過程 —心理社会学科の 4 年間を振り返って(1)—

後藤 和史<sup>\*※</sup>・小島 弥生<sup>\*</sup>・谷 雄祐<sup>\*</sup>・西浦 真喜子<sup>\*</sup>

仲嶺 実甫子<sup>\*\*</sup>・河野 俊寛<sup>\*\*\*</sup>・林 洋一<sup>\*</sup>

The Formation Process of Psychology Concepts in University Students  
through Psychology Education

Kazufumi Gotow<sup>\*</sup>, Yayoi Kojima<sup>\*</sup>, Yusuke Tani<sup>\*</sup>, Makiko Nishiura<sup>\*</sup>  
Mihoko Nakamine<sup>\*\*</sup>, Toshihiro Kono<sup>\*\*\*</sup> and Yoichi Hayashi<sup>\*</sup>

Received July 17, 2025

Accepted September 4, 2025

## Abstract

This study investigated the transformation of psychology concepts among undergraduates at Hokuriku University's Department of Psychology, established in 2021. We hypothesized that students' understanding would shift from a pop psychology perspective at enrollment to an academic one by graduation, reflecting the curriculum's effectiveness. A free association task using "psychology" as a stimulus word was administered to first-year students in April 2021 and graduating students in February 2025. Co-occurrence network analysis showed that at enrollment, students associated psychology with counseling, general emotional states, and pop psychology terms like "mentalist". By graduation, their concepts had shifted to academic themes, including psychological methodology, specific fields, and specialized clinical psychology terms. This transformation from a general, pop-influenced understanding to a specialized, academic one suggests the four-year curriculum effectively fostered academic development. The study demonstrates the utility of this simple associative method for curriculum evaluation.

キーワード：心理学教育, 大学教育, ポップ心理学, アカデミック心理学

---

\*\* 北陸大学国際コミュニケーション学部心理社会学科 Department of Psychology,  
Hokuriku University

\*\*\* フェリス女学院大学グローバル教養学部心理コミュニケーション学科  
Department of Psychology and Communication Studies, Faculty of Global Liberal Arts,  
Ferris University

\*\*\* 東京農工大学工学研究院 Institute of Engineering, Tokyo University of Agriculture  
and Technology

\*責任著者 後藤和史 Kazufumi Gotow k-gotow@hokuriku-n.ac.jp

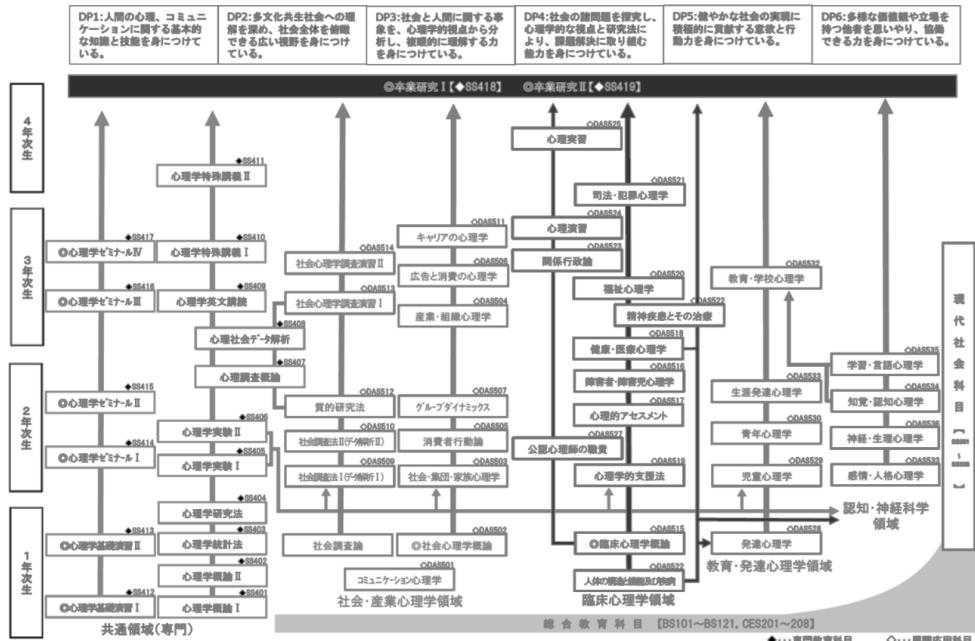
## 問題と目的

北陸大学国際コミュニケーション学部心理社会学科 北陸大学は 1975 年に開学し、開学 50 周年を迎えた 2025 年現在では 4 学部 7 学科をもつ総合大学である。北陸大学における心理学の専門教育の歴史は浅い。2021 年 4 月に国際コミュニケーション学部に心理社会学科が設置され、初の入学生を迎えた。

本学科は「心理学を幅広く学ぶ」「現代社会の課題を知る」「人間を総合的に理解する」「課題解決能力を身につける」を教育目標としている。そして心理学関連の資格として、公認心理師（大学条件）、認定心理士（心理調査士含む）、社会調査士をカバーしたカリキュラムを設定している。学科設置前から赴任前の専任教員間で議論を行いながらカリキュラムツリー（Figure 1）を作成して、1年前期から4年後期まで各科目が段階的かつ有機的につながる形とした。

Figure 1 北陸大学国際コミュニケーション学部心理社会学科のカリキュラムツリー

心理社会学科カリキュラムツリー



1年次では「心理学の基礎を学び、現代社会について理解を深める」として心理学概論I,II、心理学研究法、心理学統計法など概論や方法論の基礎に関する授業を設定した。2年次では「データ解析を用いた心理学の研究法と専門科目を学ぶ」として心理学実験I,II、社会・集団・家族心理学、知覚・認知心理学など心理学の研究法と各分野に関する授業を設定した。3年次では「より深く、高度な知識とコミュニケーション能力を身につける」として産業・組織心理学、福祉心理学、教育・学校心理学など心理学の応用領域に関する授業を設定するとともに公認心理師資格のための心理臨床実践の学内演習である心理演習

を設定した。4年次はこれまでの心理学の学修成果の集大成として「卒業研究に取り組み、卒業論文を完成させる」ことを目的とした。

そして2025年3月に初の卒業生を送り出した。民間企業、心理系公務員や心理系福祉職（児童指導員）への就職、公認心理師資格に対応した大学院への進学などさまざまな進路で活躍できる人材を送り出すことができたと考えている。

**大学教育のカリキュラム評価** 心理学に限らず大学教育のカリキュラムは一定の段階で振り返って評価をする必要がある。竹中(編)(2023)では評価の指標として、重要な授業科目（卒業研究など）、学生に対するアンケート調査、成績データなどを挙げている。しかしながらこれらは学年間や入学年次ごとといった学部や学科内の比較は可能な指標であるとしても、外的な比較に耐えうるものではない。一方、大学間で比較しうるような外的な指標としては、たとえば心理系学部・学科の場合、心理系公務員の採用者数、心理系大学院への進学者数、認定心理士や心理学検定といった心理学系資格の取得者数などが考えられるが、これらは一部の学生の成果を示したものに過ぎない。

そこで心理系学部・学科において専門教育カリキュラムの成果を評価するために、簡便に多くの学生のデータを入手できる外的指標として、本研究では連想課題を用いて心理学の概念構造の変化を調査することを提案したい。

**ポップな心理学とアカデミックな心理学** しかしながらひとつの問題がある。心理学は、一般市民が概念構造として持っている「ポップな心理学（pop psychology、「しろうと心理学」「素朴心理学」とも呼ばれる）」と、研究者が行っている「アカデミックな心理学（academic psychology）」とがあり、その乖離が問題とされている。「ポップな心理学」とは、科学的根拠が不明確であったり、知見が体系的に蓄積されていなかったり、反証可能性に乏しかったりする一般に広く知られた心理学概念を指す。一方「アカデミックな心理学」とは、科学的な研究手法に基づいて確立された専門分野としての心理学概念を指し、大学の心理学専門教育は、このアカデミックな知識や技法を体系的に教授することを目的としている。

たとえば佐藤・尾見・渡邊（1994）は、ポップな心理学とアカデミックな心理学のズレを心理学専攻学生の架空の日記として記述している。そのあらすじは、ポップな心理学観をベースに心理学専攻に進んだ大学生がアカデミックな心理学を次第に学んでいって卒業するが、後に一般人のもつポップな心理学観に違和感を持つ。これは寓話的ではあるが、大学でアカデミックな心理学を系統的に学んできた者なら誰もが通ってきた道を描き出しているのではないだろうか。

楠見（2018）は日本心理学会教育研究委員会が行った一般市民を対象とした心理学に関する調査の結果を報告している。その中の心理学に関する知識を訊いたテストで正答率が低かった問題は「私たちの脳は全体の10～20%程度しか使われていない（正答×）」、「右脳と左脳のどちらかが優位かで右脳型と左脳型に分けられる（正答×）」といったポップな心理学として流布しているような脳科学的知識であった。

**心理学の概念ネットワークの把握** このように個々の心理学の概念構造はさまざまなものであり、特定の個人や集団がどのような心理学概念を持っているのか、そして心理学の専門教育によって変化しうるのかを把握したいと思う。

その背景理論としては、活性化拡散モデル（Collins & Loftus, 1975）を挙げることができる。このモデルでは、ある概念が提示されると他の概念が活性化され、さらにその概念と関連性の高い他の概念にも活性化されていく。たとえば「心理学」が刺激語として提示

されると、特定の個人の中にある「心理学」の関連語が活性化されて連想語として想起され、さらに連鎖的に関連語の想起が起きることとなる。とすると、心理学系学部・学科・専攻の学生といった一定の母集団で同様な課題を行った場合、その結果は母集団内で共有されている心理学の概念ネットワークを反映していることとなる。

関連する研究として宮本(1994)は、一般教養科目の心理学概論授業を受講した学生に対して受講前後に心理学のイメージをSD法による形容詞対（「暗い—明るい」など）を用いて訊いたが、受講前後で明確な違いは見られなかった。また松井(2000)は、医療系大学で半期の心理学概論授業を受講した学生（医学部・薬学部）を対象に受講前後に心理学のイメージを自由記述で求めた。その結果、受講前では「心がわかる」「おもしろそう」「難しそう」「つかみどころがない」といった一般的なイメージと「神秘的」「うさんくさい」「心理クイズ」といったポップな心理学をベースとしたイメージだったが、受講後には「科学的」「体系的」「脳との関係」といったアカデミックな心理学をベースとしたイメージに変容していた。

**本研究の目的** そこで本研究では心理系学科に在籍した大学生に対して、入学時と卒業時に「心理学」を刺激語とした連想課題を実施することで、心理学の概念構造がどのように変化をしているかを検討した。もし北陸大学国際コミュニケーション学部心理社会学科の心理学教育カリキュラムが機能しているなら、入学時のポップな心理学的な概念構造が卒業時にはアカデミックな心理学な概念構造に変容していることが期待される。

## 方法

**参加者** 2021年4月に北陸大学国際コミュニケーション学部心理社会学科に入学し2025年3月に卒業した学生を対象者とした。

**手続き** 2021年4月の心理学概論Iの第1回授業の予習課題としてMicrosoft Formを用いて「心理学から連想される言葉を列挙してください」と自由記述形式で訊いた。同様の課題を2025年2月に卒業研究IIの課題として実施した。いずれも授業課題として行ったために明示的な調査参加同意手続きは取っていないものの、内容は心身への侵襲性が極めて低いこと、分析結果を授業でフィードバックすることを示したこと、分析および結果は匿名化していることなどから倫理上の問題はないものと考えられる。

結果的に、2021年4月時点では45名、2025年2月時点では27名からの回答が得られた。以降、2021年4月の回答を「入学時」、2025年2月の回答を「卒業時」と呼ぶこととする。

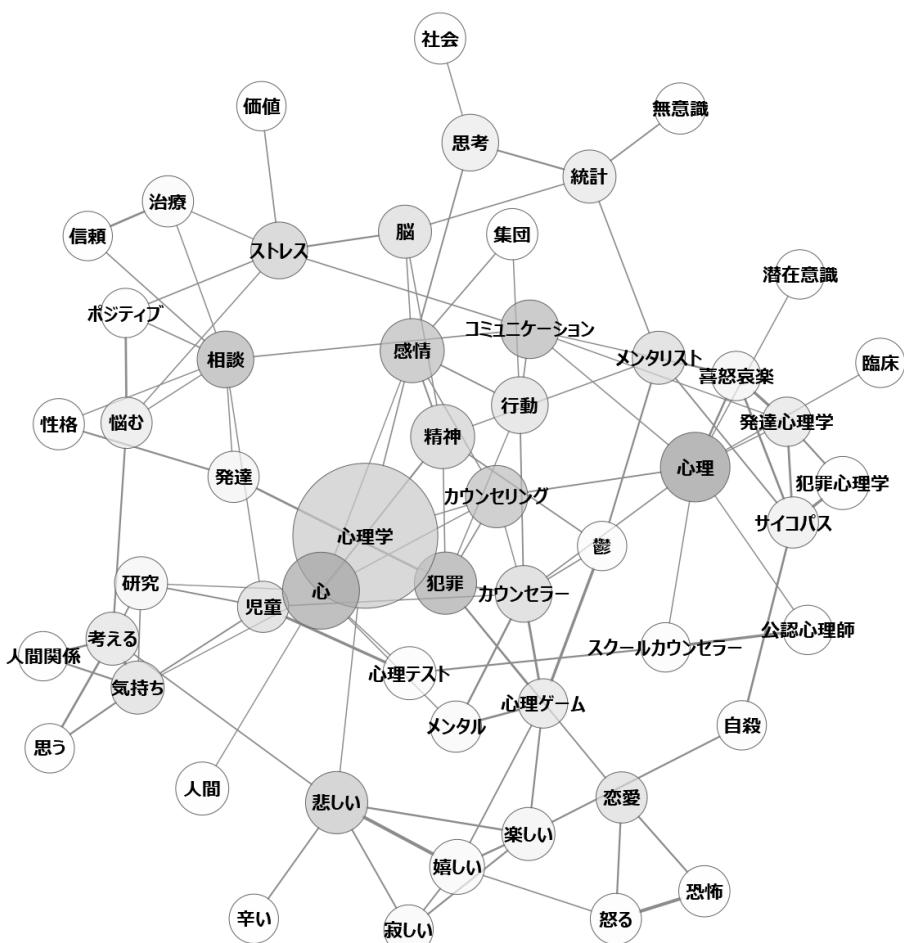
## 結果

調査で得られたテキスト回答は、本質的には反復測定された対応のある時系列データではあるが、入学時と比べて卒業時の回答数が著しく少ないため、情報量の損失を考慮して別々の回答として取り扱った。そしてテキスト回答には理解の利便性を図るため「心理学」を追加した。

分析には KH Coder (ver.2.00f; 樋口, 2004) による共起ネットワーク分析を用いた。共起ネットワーク図の作成においては、回答数の違いを考慮しながら可視性を重視してそれぞれで設定を変えた。

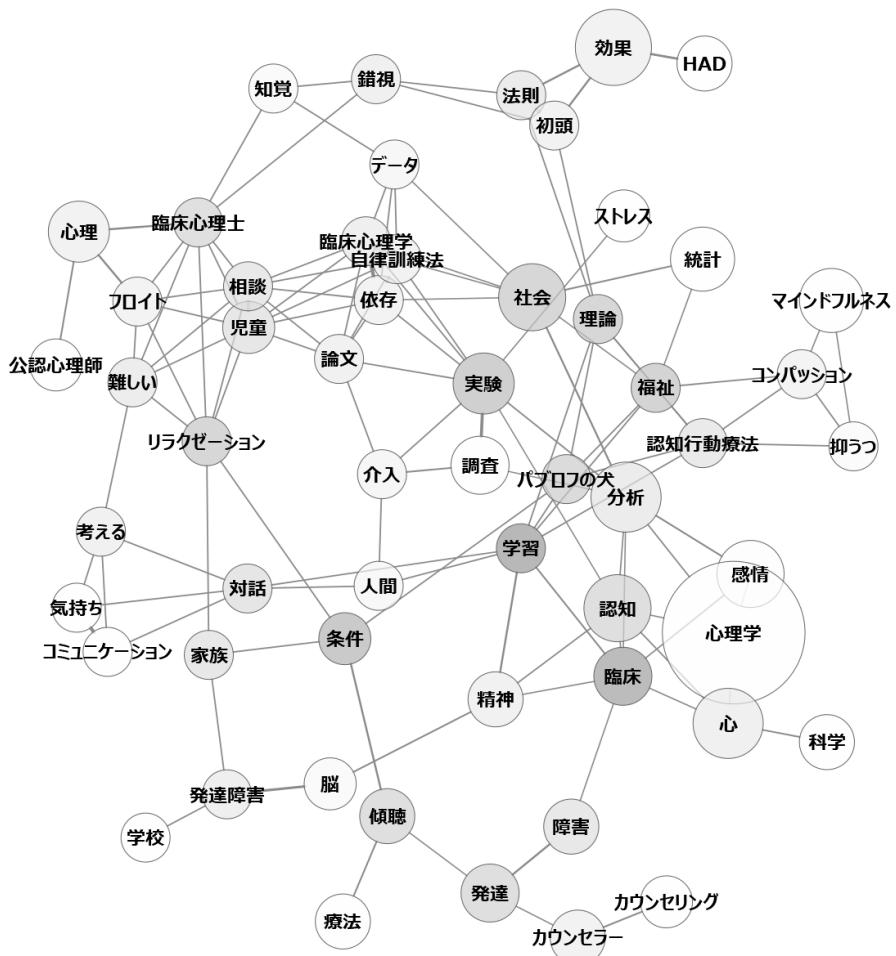
**入学時の心理学イメージ** 入学時の回答に対する共起ネットワーク分析の結果を Figure 2 に示した。入学直後の学生が心理学から連想する言葉には以下のような特徴がみられた。(1)カウンセリング関連：「カウンセリング」「カウンセラー」「スクールカウンセラー」「公認心理師」といった言葉が多く出現し、「相談」「治療」なども挙げられていた。(2)一般的な感情・精神状態：「心理」「心」「精神」「意識」といった一般語、「気持ち」「悲しい」「嬉しい」「楽しい」「寂しい」「鬱」といった感情語が挙げられていた。(3)ポップな心理学：「メンタリスト」「心理ゲーム」「心理テスト」「潜在意識」「無意識」「犯罪」「サイコパス」といったテレビや書籍、ウェブなどを通じて取り上げられそうな刺激的な言葉が散見された。

Figure 2 入学時（2021.4）における心理学の概念構造



**卒業時の心理学イメージ** 卒業時の回答に対する共起ネットワーク分析の結果を Figure 3 に示した。卒業間近の学生が心理学から連想する言葉には以下のような特徴がみられた。(1)心理学の方法論：「統計」「実験」「調査」「分析」「検定」「科学」「論文」「HAD（※Excel 上で動作する無料の統計分析パッケージ、清水, 2016）」といったアカデミックな（科学としての）心理学のバックボーンとなる方法論に関する用語が挙げられていた。(2)心理学の各分野：「認知」「臨床」「社会」「臨床」「発達」「感情」「知覚」といった心理学の領域が挙げられていた。(3)臨床心理学領域の用語：「臨床心理学」「認知行動療法」「マインドフルネス」「コンパッション」「自律訓練法」「傾聴」「公認心理師」「臨床心理士」「フロイト」「初頭」「プロト」「相談」「児童」「難しい」「リラクゼーション」「思考」「コミュニケーション」「家族」「対話」「条件」「人間」「学校」「発達障害」「発達」「傾聴」「療法」「カウンセリング」「カウンセラー」「障害」「精神」「臨床」「心理学」「心」「感情」「科学」などの用語が挙げられていた。

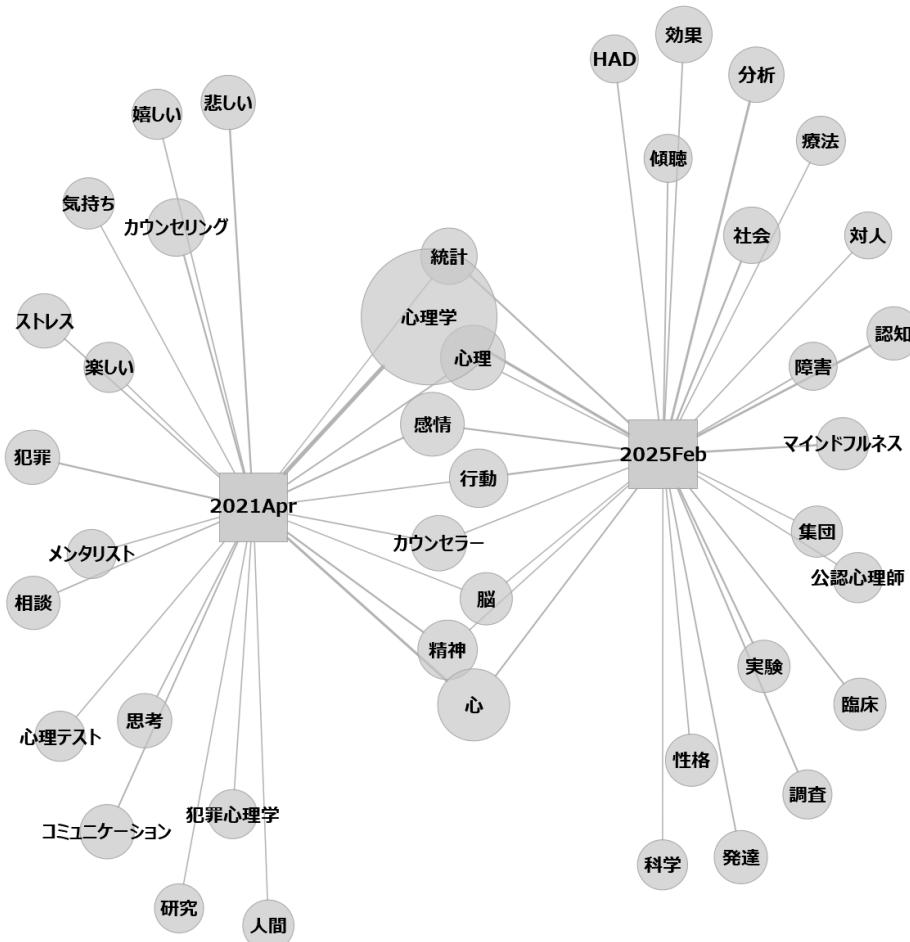
Figure 3 卒業時（2025.2）における心理学の概念構造



**入学時と卒業時の比較** 入学時と卒業時とを比較した共起ネットワーク図を Figure 4 に示した。入学時、卒業時のみに出現した語は前節で述べたような語であったが、双方に

共通する語として一般的な心理に関する語（「心」「心理」「精神」「感情」「脳」），カウンセリング・臨床心理学に関する語（「カウンセラー」）に加え，方法論に関する語（「統計」）が出現していた。

Figure 4 心理学の概念構造の入学時と卒業時の比較



## 考察

心理学の概念構造はどう変化したのか 入学時には(1)カウンセリング関連，(2)一般的な感情・精神状態，(3)ポップな心理学を中心とした心理学の概念構造が得られた。

一般的に大学入学までに出会うかもしれない心理職はスクールカウンセラーなどの臨床心理士ないしは公認心理師であり，実験心理学や認知心理学を専門とする心理学者に出会うことは意図的に行動しない限りはまずないであろう。日本心理学会（2020）は『高校生

のための心理学講座 YouTube 版』と題して、アカデミックな心理学者による心理学各分野のトピックを解説した動画をアップし続けているが、2025年7月現在の動画視聴回数は最大で18000回弱と多くはない。一方、同じプラットフォームである YouTube 上でポップな心理学のキーワードの一つである「潜在意識」や「無意識」で検索をすると60万回前後の再生回数を数える非専門家による動画が複数確認できる。このように日常生活上で出会う心理学者や心理学的コンテンツは限定的ないしはポップな心理学であることからこのような概念構造になったものと思われる。ただし、Figure 3でも入学時・卒業時に共通して現れる「統計」は方法論に関する唯一の語であり、「心理学は統計を使う」という言説は入学前から持たれているのではないかと思われる。

一方、卒業時にはポップな心理学に関する語は消え、(1)心理学の方法論、(2)心理学の各分野、(3)臨床心理学領域の用語を中心とした概念構造が得られた。これは Figure 1 に示したような心理社会学科のカリキュラムにしたがってアカデミックな心理学に関する各種授業を体系的に学んだ結果であるのは想像に難くない。方法論に関する語である「統計」に関しては統計分析パッケージである「HAD」も登場しており、より具体性の高い概念となっている。臨床心理学領域では「マインドフルネス」「コンパッション」「自律訓練法」とかなり具体的な技法が言及されていたが、臨床心理学系教員個々人の臨床的オリエンテーションに依るものであり、授業内でも取り上げてきた内容が反映されたものであると考えられる。

以上のことから、心理学の概念が、入学時点ではそれまでに見聞きしてきた一般的あるいはポップな心理学をベースとした構造であったものから卒業時点ではアカデミックで専門性の高い構造へと変化していくことが示唆された。これは本研究で設定した仮説通りである。宮本(1994)や松井(2000)のように単一の授業の受講前後で心理学のイメージや概念構造の変化を検討する試みはあったものの、大学在籍4年間という長いスパンで変化を検討した研究はみられず、オリジナリティの高いものと言える。

**心理社会学科のカリキュラムは機能したのか** 本研究で設定した仮説通りに心理学の概念構造が変化したことは、心理社会学科のカリキュラムが機能したことを示唆している。

機能した背景のひとつには、学科設置前のカリキュラム策定において専任教員間で議論したり協働したりしてきたのと同様に、学科設置後も必要に応じて議論したり協働したりしながらカリキュラムの詳細をブラッシュアップしてきたことが挙げられる。このように協働できた背景には著者ら学科教員が分野は異なるものの全員心理学を専門としており、多くが大学・大学院の心理学課程で学び、研究し、教育をしてきた。結果として心理学の専門教育に関して、本稿で表現できることからできないことまで共通するイメージを持っていたことから各教員が担当する科目間の連携や統合性を確保することが可能であったと考えられる。

それに加えて教員間の良好な人間関係がカリキュラムの継続的な改善を支える重要な基盤となっていたように思われる。具体的には、Microsoft Teams を用いて作成した学科教員チームやグループチャット、個人チャット機能によって教員間で授業内容の調整や学生指導に関する情報共有や相談が頻繁に行われ、各科目間の連携や教育目標の共有が効果的に行われていた。

こういった開放的で協調的な関係性の背景にはインフォーマルないしはセミフォーマルな交流機会をも含んでいる。二瓶(2020)によると、日本における職場は総じて職場メンバー同士が深く関わり合いながら業務を行うという特性があるため、インフォーマルな要素を含んだ職場交流は、効果的な業務の遂行につなげていくために必要であり、また特にテレワークが普及されていく状況においてはその重要度が増していくと述べている。

**本研究の限界および今後の展開** 心理学の概念構造の変化については、本研究では1つの大学の心理系学科に在籍する学生のみの調査の結果であったため、外的妥当性の問題に対応するために他大学に調査対象を広げる必要がある。また、今回の調査に関するより深い知見を得るために、インタビュー調査などマルチメソッドな方法で検討する必要もあるだろう。

応用可能性として、Figure 2 や Figure 3 で示されるような本研究の共起ネットワークはそのまま概念構造ネットワークになっているともいえるだろう。また Figure 4 で示したような入学時と卒業時の比較図は DRM パラダイム (Roediger & McDermott, 1995) を用いて「心理学」を虚再生させるためのリストとして活用することも可能であろう。場合によっては初学者と学修者とを比較するリストともなりうる。

またカリキュラム評価の方法として、「心理学」を刺激語とした連想課題、というかなり簡便な形式で行うことができた。他大学の心理系学部学科でも応用可能であるとともに、刺激語となるキーワードを工夫することによって他学部他学科でも同様のアプローチをとることができるかもしれない。

ただし、心理系学部学科で同様の調査を行う場合に考慮すべき事項がある。それは高校倫理で心理学の内容が反映されるようになったことである。2018年に告示され 2022 年より実施された学習指導要領では「倫理」において「青年期の課題を踏まえ、人格。感情、認知、発達についての心理学の考え方についても触れること」となった(文部科学省, 2018)。それに対応して各社は対応する教科書を新作したが、NHK 高校講座でも 2022 年度より「倫理」の講座を新作し (NHK 放送文化研究所, 2023), 第 3 回「人間の心の働き」では、学習の仕組み、学習と動機づけ、パーソナリティの形成がトピックとして取り上げられ、学習メモ内のコラムではパーソナリティの Big Five モデル (McCrae & Costa, 1987 など) に加えて HEXACO モデル (Ashton & Lee, 2007) を取り上げるなど最新の研究をフォローしている。そして 2025 年 1 月の共通テストの「公共、倫理」科目では新課程の認知心理学の独立した大問が登場するなど大きく編成が変わっている(朝日新聞, 2025)。これからは心理学の基礎的なトピックを学んだ高校生が大学に入学している。新入生の心理学の概念構造が変化することが予想され、大学の心理学の専門教育のカリキュラム編成に影響を与えるかもしれない。

## 引用文献

- 朝日新聞 (2025). 公共、倫理 代ゼミ問題分析 大学入学共通テスト Retrieved 2025, June 18<sup>th</sup> from <https://www.asahi.com/articles/AST1L3GB2T1LDIFI01RM.html>
- Ashton, M. C., & Lee, K. (2007). Empirical, Theoretical, and Practical Advantages of the HEXACO Model of Personality Structure. *Personality and Social Psychology Review, 11*(2), 150-166.
- Collins, A. M., & Loftus, E. F. (1975). A Spreading-Activation Theory of Semantic Processing. *Psychological Review, 82* (6), 407-428.
- 樋口 耕一 (2004). テキスト型データの計量的分析—2 つのアプローチの峻別と統合一理論と方法, 19 (1), 101-115.
- 楠見 孝 (2018). 誰もがみんな心理学者?—日常生活で役立てるために 楠見 孝(編) 心理学って何だろうか? 四千人の調査から見える期待と現実 (pp.1-29) 誠信書房
- 松井 三枝 (2000). はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化 —「心の科学」受講前後の調査から— 富山医科大学一般教育, 23, 63-68.

- McCrae, R. R., & Costa Jr, P. T. (1987). Validation of the five-factor model of personality across instruments and observers. *Journal of Personality and Social Psychology, 52* (1), 81-90.
- 宮本 邦雄 (1994). 女子大学 1 年次学生の「心理学」講義評価と「心理学」イメージ. 東海女子大学紀要, 14, 121-129.
- 文部科学省 (2018). 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) Retrieved 2025, June 12<sup>th</sup> from [https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt\\_kyoiku02-100002604\\_03.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230120-mxt_kyoiku02-100002604_03.pdf)
- NHK (2022). NHK 高校講座『倫理』第 3 回 人間の心の働き Retrieved 2025, June 12<sup>th</sup> from [https://www2.nhk.or.jp/kokokoza/watch/?das\\_id=D0022130153\\_00000](https://www2.nhk.or.jp/kokokoza/watch/?das_id=D0022130153_00000)
- NHK 放送文化研究所 (2023). NHK 年鑑 2023 第 3 部 NHK の番組解説『NHK 高校講座』 Retrieved 2025, June 12<sup>th</sup> from <https://www.nhk.or.jp/bunken/book/nenkan/2023/program.html?p=152>
- 二瓶 哲 (2020). 日本における職場交流の形式についての一考察 一社会的文脈から今後の動向を見据えて— 日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 21, 333-344.
- 日本心理学会 (2020). 高校生のための心理学講座 YouTube 版 Retrieved 2025, July 9<sup>th</sup> from [https://www.youtube.com/playlist?list=PLn-iXpJgMkxuVHV9CCbS\\_tIuNB0En9qS1](https://www.youtube.com/playlist?list=PLn-iXpJgMkxuVHV9CCbS_tIuNB0En9qS1)
- Roediger, H. L., & McDermott, K. B. (1995). Creating false memories: remembering words not presented in lists. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition, 21*, 803-814.
- 佐藤 達哉・尾見 康博・渡邊 芳之 (1994). 現代日本における 2 つの心理学：ポップな心理学とアカデミックな心理学—そのズレから心理学を考える 行政社会論集, 7(1), 1-45.
- 清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 竹中 喜一(編) (2023). シリーズ大学教育の質保証 2 学習成果の評価 玉川大学出版会